



春、桜が咲くとよく思い出すご家族がいます。30年前、住職がTVディレクターをしている時、取材させていただいたご家族です。

「介護」をテーマにした番組で、3人家族のうち2人が、ほぼ寝たきりの生活でした。今月は、その方の手記からのことばです。



### 手記『桜・・・最愛の母と』 秋月はるみさん

私と母はいつも4畳半の部屋で枕を並べて一緒に寝ていました。62歳の時にパーキンソン病に侵された母と、2歳の時に小児麻痺にかかった私を、近くのスーパーに勤める姉が、面倒を見てくれました。

ヘルパーさんや訪問看護のお世話に成ってから、私達は散歩に行けるようになりました。毎年、母と一緒に桜の花に会いに行ける散歩を、心を踊らせて待っていました。川べりの桜は両側の枝が川の方にたれていて、まるで枝垂桜のようで、とても綺麗です。今年も母と見に行ける嬉しさを、一緒に行ける喜びを、分かち合いたいと思っていました・・・

母が亡くなった直後、悲しみに心が癒えず、花を見て楽しむ心になれませんでした。いつも、どんな時にでも一緒だった母が今は、もういません。桜の花を背景に車いすを並べて、手をしっかりつないで写っている写真を飾っています。母の事は、忘れることは無いけれど、語れば涙が、思えば心が熱くなり、頬がぬれます・・・

私は幸か不幸か、親もとから巣立つことはできませんでした。24時間、母と過ごすことができた私は、本当に幸福者です。今年の春は母と一緒に桜見にはいけないけれど、いつもの年のように、人々の心に残る可憐な花々が咲き乱れることでしょう。

「諸行無常」という仏教語があります。「あらゆるものは移ろいゆく」という意味でよく使われています。風に散っていく桜を見ながら、「諸行無常」の思いを募らせた経験がある方もおられるでしょう。

しかし「諸行無常」とは、桜のことでなく、私たち自身のことであることを、秋月さんの手記は教えてくれます。移ろいゆくはずのものを「離したくない」と、握りしめ続けるのが私達の姿ではないでしょうか（命もその一つです）。そして「諸行無常」とは、どんなに握りしめていても、いずれはこの手を離れていくという厳しい真実を示すことばです。

今年も真光寺の境内の桜が、美しい花をたくさんつけてくれました。それを見ながら思います。阿弥陀如来は、手離すことができない私を、「手離すことができないまま救いとうろう」とおっしゃってくださいました。そして大切なものを手離せず、握りしめたままで生きざるを得ない者をこそ、悟りの世界・お浄土へと迎えとってくださいます。

